

# 招聘 研究員

氏名	謝 咏 (XIE Yong)
所属機関等	浙江工商大学 東亜文化修士課程／日本文化研究所所長補佐
受入期間	2015年12月6日～2015年12月25日
指導教員	小熊 誠
研究課題	筆談文献に見られる挿絵の調査と研究



## 筆談文献に見られる挿絵——「朝鮮漂流日記」を中心に

謝 咏

東アジアに見られる独特なコミュニケーションの方法として、言語や民族、文化の障壁を超越して共有される漢字の筆談は東アジア世界において、日本対中国のみならず、朝鮮半島や近世の琉球およびベトナムの場合でも同様に用いられてきた。したがって、千年以上の東アジア地域の交流のなかで、多くの筆談文献が今なお残っている。これらの筆談文献は貴重な史料として、その時代の文化、社会、経済また世間話に至るまで、その実態を忠実に記録しており、あたかも紙の録音機のようなものである。

筆談文献の内容を大雑把に分けてみると、二つの面が見えてくる。一つは詩文の唱和である。これは漢文の素養を身につけていた文人達が、詩文の交流により、お互いの気持ちを伝え、東アジアの文化圏に共通している儒家の文化を基礎に、学問や時勢、文化の交流をするものである。例として挙げるのは、清国の駐日使節と日本人との間で交わされた詩をまとめた『芝山一笑』という著名な文献である。

もう一つはお互いの実態を把握するための答問であり、よく漂流民達が他国に漂着した時に、問情官からいろいろと質問を受けたりして、お互いの実態を把握しようとする問答集である。例としては枚挙にいとまがないが、関西大学の松浦章教授が「前近代における東アジア海域の筆談形態」<sup>1)</sup>で挙げられたものである。また漂流民以外にも幕末時代の武士達が異国で視察を行う際に、意図的に詩文の交流を避け、代わりにその国の実態を把握するためにだけに注力する例も見られてる。例えば、1862年に千歳丸に乗って上海を訪ねた乗員である高杉

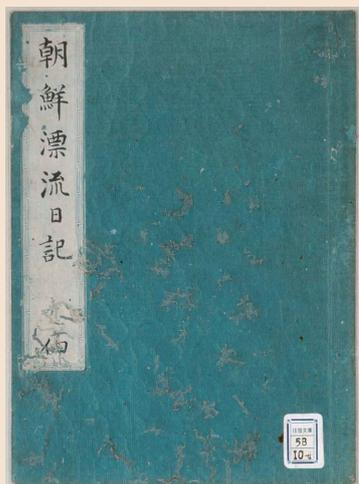
晋作氏も「此书、或以汉字、或以国字、随便取笔、务记实事、不敢用于文字唯要、使真知己知幕府支那行之始末、为他日我邦外国行之鉴、不欲博示诸友人也」<sup>2)</sup>と自分の紀行文で、詩文の交流より中国事情の調査に努めているという旨を述べている。勿論、詩文唱和と実態問答ははっきり分けられず、友情が深まるにつれ、詩文唱和の混在も確認できる。

筆談というのはあくまでもその場でできた臨時のものであるため、言葉が乱雑なケースがある。著者にそういった部分を削除したり、潤色を加えるなどの編集をかさねている可能性があるため、現存している筆談文献は原稿と若干違うことを覚悟しなければならない。また意思表示が不十分の場合は絵などを用いて補足していると推測できるが、前に述べたように編集を重ねているうちに削除された部分が多いと考えられる。

わたしは王勇教授ひきいる会合に参加し、週に一回の「筆談研究会」で原本を輪読しているうち、彼らは筆談用の紙に図形を書いていたことに気がついた。この原本とは日朝間の筆談記録『朝鮮漂流日記』<sup>3)</sup>という文献である。

1819(文政2)年7月に、沖永良部島での勤務を終えた薩摩の代官安田義方を始めとする一行25名が、本国への帰途、朝鮮半島に漂着した。安田は、朝鮮王朝の地方官僚らと漢文の筆談によって、現地での待遇と送還について折衝しながら、酒を酌み交わし、詩文を贈りあい、交流を深めていく。漂流民送還制度を頼りに、釜山湾の一角にある対馬藩の出先機関である倭館に辿りつ





●写真1 『朝鮮漂流日記』四 表紙<sup>4)</sup>



●写真2 『朝鮮漂流日記』三 7<sup>5)</sup>

き、対馬藩役人に引き取られ、対馬行きの船に乗るところまでが記されている。安田が遺した詳細な記録から、漂流民による近世日朝交流のすがたが見えてくる。この文献の内容に関して池内敏の著書『薩摩藩士朝鮮漂流日記―「鎖国」の向こうの日朝交渉―』<sup>5)</sup>の中で詳しく分析している。さらに漂流民のほとんどが読み書きのできない一般市民であったのに対し、安田は武士であり、朝鮮官僚と「詩文贈答」ができるだけの教養を有していた点で、他の漂流記とは情報量に格段の差がある。

また『朝鮮漂流日記』には筆談記録から見える素顔の日朝交流以外にも81幅の彩色挿絵が描かれており、それにも注目すべきである。地理や方角などをあらわすための地図や地形図のみならず、港口・船舶・人物・衣冠・器具・文房具・武器など多岐にわたっており、七巻の原稿に、合わせて彩色挿絵が81枚も描かれている。地図、地形図、港口(28枚)、船舶(5枚)、人物と衣冠(14枚)、農具、文房具、武器等(19枚)、天候(6枚)、食事(5枚)、その他(処罰、行列)(4枚)で、すべて著者の安田氏がじかに見聞きして忠実に記録したものである。これは安田氏に絵心があったが、故の恩恵であり、『朝鮮漂流日記』の記載によれば、彼の所持品の中には画器箱15坐、画袱3件が含まれていたことが分かっている。

筆談というのは言葉の壁を越え、異文化の人間との会話ができるのが特徴だが、さらに異国の目から観察して描かれた絵が更にその価値が見出せる。当時の東アジアの文化においてトップと誇る中国の絵画では、写意的な意味が強く、現実を反映するリアリズムそのものはかなり希薄である。朝鮮時代の画壇は中国絵画から強く影響を受け、実際の生活が絵の主題となっている。日々の営みをより豊かに表現した多様な風俗画が登場するのが

18世紀半ば以降のことであり、画院画家を中心に俗画が制作されるようになっていた。しかし、このような写実的な表現と見られた画面の中には、「礼曹に属した図画署の画員はごく限られた主題の風俗画や人物画を製作していたが、主題の選択は図画署を管轄していた官僚の統制下にあった」<sup>6)</sup>、つまり特定の図様が繰り返して活用されることや、規範性の高い伝統的な図柄が風俗表現として使用されていたことが分かっている。しかし同時に江戸時代にある日本はすでに図像資料が豊富に制作され、自ら絵筆を持って絵を描いた素人絵も出てきている。また観察した結果を文字では表現し尽くせないので、実際の事物を描いてイメージをつたえようとした絵日記もある。安田の『朝鮮漂流日記』もその一つといえる。

この81枚もある彩色挿絵は漂着地から送還地までの間に安田が出会ったものを記録しているが、中には、珍しい場面も含まれている。これは朝鮮の官僚が漂流民のくしを盗んだ下人に対して、刑罰を行ったことを記録した「笞撻罪人圖」<sup>7)</sup>である。図の上に「笞撻罪人圖 僉使萬戸等之官人、往々糾問之、下官人伏于左右、告其狀歩吏其臀」と記していると同時に、「金基昉書曰：昨日我等下隸以執梳罪、貴公隸等、今方羽立欲捉我云、禁之何如？」「余書曰：非下隸之盜也、玩其梳、而梳墜入其煙匣也、何罪之有也」というように筆談の記録も加えている。普通の朝鮮人の画家ではとても描けない場面を日本人の漂流武士が記録している。

絵を描く動機も検討してみよう。まず多数の画材を所持していたことから安田は絵が得意であったと推測できる。そのうえで、『朝鮮漂流日記』の内容に少し触れてみよう。著者である安田が「余自少小、不慣文辭。雖





●写真3 『朝鮮漂流日記』七 12<sup>9)</sup>

の度重なる検問に対して、解釈を行い、少しずつお互いの理解を得て、また漢文のレベルの向上に伴い、徐々に筆談を展開することができるようになった。その後、対馬の倭館へ向かっている途中も、地方官僚や船頭に尋ねながら、所在地の確認も、路線図も数多く描き、筆談の文字部分を忠実に原稿に再見し、自分が得意な絵に丁寧に色彩をつけ、編集を行ったことがしのばれる。しかし前述のように、筆談文献は何度か編集作業が行われ、実際には史料とは少し離れている場所もあり、簡単な絵などは取るに足りない部分と見なされ、削除されたので、現存しているのはごく稀である。視覚による筆談交流は東アジアに見られる独特なコミュニケーションの方法として、単なる意思疎通という枠を越えて、東アジアの文人の精神世界に訴えかけるうえで、絵などを含めて重要な役割を果たしたことを認識すべきだと思う。

然、自出永良部以來、於舟中聊效漢字、自顧堪捧腹矣。且漂到于此異域也、不得已而与異邦人筆談」と述べており、漢文の扱いは最初から得意ではなく、その後、朝鮮の地方官僚と筆談しながら少しずつ慣れてきたことが分かる様子が分かる。ようやく都からの京訳官（通訳）を迎えたものの、「彼亦曰：波自迷底、波自迷底（はじめまして）彼對曰：左様泥御座利麻湏（さようでございます）彼所答唯若此耳、其他之言語、則皆非我國語也。我輩雖傾耳聽之、然不一通焉、我又有言。則彼只答曰：左様泥御座利麻湏云。（さようでございます）」というように、2句しか話せない通訳のことに悩んでおり、意思の疎通の苦勞を深刻に記録している。また81枚の挿絵で一番に注意すべきは、三分の一以上を占めている地図や地形である。これは漂着地から倭館へ向かう途中、安田が格軍（船頭のこと）に地名や路線を確認している際に描いたものと思われ、文化の素養が低い船頭に対して、絵を最大限に活用したといえよう。最後に対馬にある倭館に到着「歸路滯留於釜山浦數月、於是乎繼次往日筆談之書、以編入于日記」というように日記として編集した。前に述べたように、得意の絵も筆談文献に入れ、後世に貴重な史料が残るようにした。

文章内容の理解を助けるための挿絵はコミュニケーションの役割も果たしている。漢文に堪能ではない著者である安田は自分が得意な絵を使い、朝鮮の地方官僚から

#### 【注】

- 1) 松浦章著「前近代における東アジア海域の筆談形態」、王勇 主编《东亚的笔谈研究》2015年、浙江工商大学出版社 P.19-32
- 2) 高杉晋作《游清五录》、冯天瑜著《“千岁丸”上海行—日本人1862年的中国观察》2001年、商務印書館 P.438
- 3) 安田義方著、高木元敦編『朝鮮漂流日記』、文政7(1824)年稿本。所蔵：神戸大学付属図書館 住田文庫 請求記号：5B-10. -MID:00019227
- 4) 出典：安田義方著、高木元敦編『朝鮮漂流日記』四 表紙 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/sumita/5B-10/image/5B10-4001.jpg> 所蔵：神戸大学付属図書館 住田文庫
- 5) 『薩摩藩士朝鮮漂流日記—「鎖国」の向こうの日朝交渉—』池内敏著 2009年 講談社
- 6) 金貞我 著「朝鮮時代の風俗画資料と絵引編纂」、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書『東アジア生活絵引き—朝鮮風俗画編』、2007年 P.125
- 7) 安田義方著、高木元敦編『朝鮮漂流日記』、第三卷 文政7(1824)年稿本。所蔵：神戸大学付属図書館 住田文庫 請求記号：5B-10. -MID:00019227
- 8) 出典：安田義方著、高木元敦編『朝鮮漂流日記』三 7 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/sumita/5B-10/image/5B10-3009.jpg> 所蔵：神戸大学付属図書館 住田文庫
- 9) 出典：安田義方著、高木元敦編『朝鮮漂流日記』七 12 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/sumita/5B-10/image/5B10-7014.jpg> 所蔵：神戸大学付属図書館 住田文庫



## 笔谈文献中所见之插图——以《朝鲜漂流日记》为中心

浙江工商大学 谢 咏

汉文笔谈作为东亚世界的一种独特的交流方法，突破了语言、民族的文化壁垒，千百年来不但在中日间，而且在朝鲜半岛、琉球、越南等地被广为运用。因此在东亚地区也保存了许多珍贵的笔谈史料，它们像录音机一样，忠实地记录了当时的社会、文化、经济百态。

笔谈文献的内容大致可以分为两大类：一为诗文的唱和，东亚的文人雅士凭借着东亚文化圈共有的儒家文化基础，交流学问，感慨世事。比如清朝的驻日外交官与日本文人之间的诗文唱和，其文集就是后来著名的《芝山一笑》文献。另外一种笔谈内容则是交流双方为了把握彼此的情况而进行的问答。例如海上漂流民在抵达他国海岸的时候就会受到问情官的盘问，这样的情况不胜枚举。关西大学的松浦章教授在其“前近代东亚海域的笔谈形态”<sup>1)</sup>一文中对此做了很好的归纳。另外，幕府末期到海外进行考察的武士中往往会避免与他人过分地追求诗文唱和，比如1862年访问上海的“千岁丸”成员高杉晋作就曾经这样写道：“此书，或以汉字，或以国字，随便取笔，务记实事，不敢用于文字唯要，使真知己知幕府支那行之始末，为他日我邦外国行之鉴，不欲博示诸友人也”<sup>2)</sup>，强调自己更倾向于对中国社会的实态。当然，诗文唱答与实情问答并不是完全区分开来，往往在彼此的诗文唱答与交流之中，双方的友情也愈加积累。

当然，笔谈作为一种现场交流的方式，其临场的表达往往意思表达不充分，或者出现粗俗的用语等情况，此时，作者一般会对其做后期加工，比如对文字加以润色，并且把不入流的文字去除。因此我们在阅读笔谈文献的时候也必须了解其与原稿或是会有些许的出入存在的。那么光是凭借文字的交流而达不到疏通意思的情况下又该如何处理呢？极有可能是使用画图来沟通，而这些画作却往往在整理文集的时候被略去。

笔者现在每周参加王勇教授举办的读书会，在阅读《朝鲜漂流日记》<sup>3)</sup>这本史料的时候，注意到了笔谈各方在交流的时候会使用画图来辅助交流。

1819年7月，结束了冲永良部岛代官任务的萨摩岛一行25人，在返回国的途中遭遇了风暴，漂流到了朝鲜半岛。《朝鲜漂流日记》记述的就是其中的安田先生与朝鲜地方官僚的笔谈记录。在文中，我们可以了解到安田与地方官饮酒做诗，深化交流，同时围绕着回国事宜进行交涉，最后依照漂流民遣返制度经对马回到日本的经过。根据安田的详细记录，我们得以了解近代漂流民遣返制度的

全貌。此史料的分析在池内敏的著书《萨摩武士的朝鲜漂流日记——锁国中的日朝交涉》<sup>4)</sup>中有详细记述，这里就不再过多触及。

而应当引起我们注意的却是书中81幅彩色的插图。这些数量众多的彩图中描绘的不仅有地理、方向等的地形图，更有港口、船舶、人物、农具、武器等多方面。统计的数据如下：地图、地形图、港口（28幅），船舶（5幅），人物、服饰（14幅），农具、文具、武器（19幅），天气（6幅），食物（5幅），其他（4幅）。这些都是作者安田用自己的画笔忠实的记录下所看到的事物。这些都是拜安田擅长作画所赐，据书中记载，他的行李中包含了15个画箱和3个画袱。

笔谈可以越过文化的壁垒，使得异文化的人也可以进行交流对话。但是从异国的眼光来观察则更加具有现实价值。众所周知，当时的东亚的绘画水平最高的当属中国，但是却缺乏对于现实的反映而侧重于写意。朝鲜时代的画坛也是受到中国画坛的影响，直到18世纪中叶，以画院画家为中心的俗画开始发展以来，才有以实际生活为主体的画作登场。但是这些看起来是写实的画作“事实上都是被礼部所属的画院从及其有限的主题之中选择，是处在官僚的统制之下的”<sup>5)</sup>。但是同时期的日本江户时代却出现了自己使用画笔记录事物的素人画，创造出了大量的丰富的图像。因为观察的结果无法用文字表现出来，所以就出现了描绘事物的绘日记。安田的《朝鲜漂流日记》应该就是其中的一种吧。

在这81幅图中都是安田从漂着地到送还地途中对自己感兴趣事物的记录，其中不乏珍贵的场面记录。这其中就有朝鲜官吏处罚偷盗漂流日本人梳子的下人的场景的「笞撻罪人圖」<sup>6)</sup>。在图中写有「笞撻罪人圖 僉使萬戶等之官人，往往糾問之，下官人伏于左右，告其狀步吏其臀」，同时又在对话中记录有「金基昉書曰：昨日我等下隸以執梳罪，貴公隸等，今方羽立欲捉我云，禁之何如？」「余書曰：非下隸之盜也，玩其梳，而梳墜入其煙匣也，何罪之有也」。这对普通的朝鲜画家来说实在是无法记录的场面，却被一名日本漂流武士记录下来，也实在是有趣。

我们再来探讨绘画的动机，首先安田随身带了许多画具，并且他擅长于绘画，这个是先决条件。再者让我们来看《朝鲜漂流日记》书中内容。对于自己的汉文水平，安田有如下自述：“余自少小，不惯文辭。雖然，自出永良部以來，於舟中聊效漢字，自顧堪捧腹矣。且漂至于此異



域也，不得已而与異邦人筆談”。即汉文非本人之所长，所以与朝鲜官僚开始笔谈也是不得已之事。后来，总算盼来了京译官（翻译），但是根据书中所记“彼亦曰：波自迷底，波自迷底（はじめまして）彼對曰：左様泥御座利麻湏（さようでございます）彼所答唯若此耳，其他之言語，則皆非我國語也。我輩雖傾耳聽之，然不一通焉，我又有言。則彼只答曰：“左様泥御座利麻湏云。（さようでございます）”翹首盼来的翻译只会说2句日语，令人啼笑皆非。而我们也由此深刻地理解了双方意思沟通的困难。另外，值得引起我们注意的是，在81幅插图中，描绘地形、位置的图占了三分之一有余。这个应该可以推测是安田在从漂着地向倭馆移动的途中，向格军（船员）确认地名，路线时作成的图，这时候。对于文化素质不高的船员来说，图画在沟通上无疑起了很大作用的。最终在到达对马倭馆后「歸路滯留於釜山浦數月，於是乎繼次往日筆談之書，以編入于日記」，花费数月时间编成为书，为后世留下了贵重的史料。

为了解文章的内容而插入文章使用的图画最终发挥了交流的作用。安田最初是因为汉文水平差而用自己擅长的画图来应付朝鲜官员再三的盘问。随着在笔谈中汉文水平的提高，渐渐地可以和朝鲜官员进行熟练的汉文笔谈。但

是在在从漂着地向倭馆移动的途中，向格军（船员）确认地名，做出了不少路线图。正如前述，笔谈文献往往经过作者的修缮，所以很多交流之中留下的画很有可能被删除，在遗留的史料中很难看到。但是所幸的是安田精于画艺，因此他对自己的画作进行加工润色后得以在史料中保存。在笔谈中除了文字之外，基于绘画的交流也是双方在跨文化上的一次重要沟通，发挥着重要作用。

#### [注]

- 1) 松浦章著「前近代における東アジア海域の筆談形態」、王勇 主编《东亚的笔谈研究》2015年、浙江工商大学出版社 P.19-32
- 2) 高杉晋作《游清五录》、冯天瑜著《“千岁丸”上海行—日本人1862年的中国观察》2001年、商務印書館 P.438
- 3) 安田義方著，高木元敦編『朝鮮漂流日記』、文政7（1824）年稿本、住田文庫 神戸大学 請求記号：5B-10.-MID:00019227
- 4) 池内敏著『薩摩藩士朝鮮漂流日記—「鎖国」の向こうの日朝交渉—』2009年 講談社
- 5) 金 貞我 著「朝鮮時代の風俗画資料と絵引き編纂」、神奈川県 21世紀 COE プログラム研究成果報告書『東アジア生活絵引き—朝鮮風俗画編』、2007年 P.125
- 6) 安田義方著，高木元敦編『朝鮮漂流日記』、第三卷 文政7（1824）年稿本、住田文庫 神戸大学 請求記号：5B-10.-MID:00019227

